
あたしのお隣さん

ハシルケンシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしのお隣さん

【Nコード】

N8327A

【作者名】

ハシルケンシロウ

【あらすじ】

あたしの隣の部屋には、お婆さんが住んでいます。実はそのお婆さんは……

（前書き）

最初、その他でアップしたのですが、こちらに引っ越してまいりました。

そんな感じの短編です。

ガリッ……、ガリガリガリガリッ……、ギギギギイ……。

時間は午前二時。

いつもいつも聞こえてくる一心不乱に壁を掻きむしる音。

生理的に嫌悪感を覚えるこの音と時間。

それは香澄の睡眠を妨げると同時に、えもしれぬうすら寒さと不快感、そして、憤りを与える事となる。

《くっ、まさか……。まさか》

不動産屋で物件を見付けたときは考えもしなかった穴。

余りにも家賃が安かったため、陰陽師の娘である友人に、一緒に下見にきてもらったし、入居後に念のため、お祓いしてもらった。霊もないし、陰陽的には最高の間取りと立地条件だとのこと墨付きまでもらっていたのに……。

《隣の婆さんが痴呆症だなんて！

きいてないわよそんなことお！》

いつもいつもこれである。

家賃が安いのも、人が居付かないのも納得だ。

ドンドンドンドンッ……。

香澄は怒りを抑えて壁を叩く。

いつもなら、それで終わっていた。

だが……、

今日は終わらなかった。

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンド

《何よ！

今日はヤタラと反抗的じゃない！》

もはや、キレてしまった。

ドンドンドン

なおも壁は叩かれ続けている。

そのわりにはあまり揺れてはいない。

少し違和感を覚えながらも香澄は、力一杯拳を壁に叩きつけた。

ドカァ！！！！

壁は激しくうちふるえた。

そうなのだ。

普通はそうなのだ。

そして《壁からの音》は途絶えた……。

次の瞬間、とんでもない音を聞く事になる。

なんと、隣のお婆さんが起き上がって玄関から飛び出して来たのだ。

《！？》

混乱した。

今までに無い展開だ。

香澄は足音が玄関前まで達したのを認識した。

ドンドンドンドンドンドンドンドンドン！！

《ああもう！

うっさいなあ！》

香澄はズカズカと大きな足音を発てて玄関へ向かう。

だが……、

玄関前へと達したとき、神経伝達を遮断されたかのように、体の自由が利かなくなってしまった。

《やだ、なに！？》

ドンドンドンドンドンドンドンドンドン！！！！！！

目の前には、激しく叩かれる玄関。

そして、その向こうには、狂おしく玄関を乱れ打つお婆さん。

このとき、初めて香澄の心にとつともない恐怖が襲い掛って来た。

《やだ！
助けて！》

ドンドンドンドンドンドンドンドントントント……。

音がしなくなる。

暫しの静寂。

だが、これが嵐の前の静けさのように思えてならない。
なぜなら、まだ帰る気配を見せていないからだった。

隣の玄関の音どころか、引き返す足音すら聞こえてこないのだ。

《帰って！

お願い帰って！

もう怒りません！

好きなだけ壁ひっ搔いていいです！

だから！

だから帰ってくださいいいいい！！》

その目からは、恐怖と嫌悪の入り混じった感情から、涙が溢れ始める。

なおも体の自由が利かない。

足元がそこに根付いてしまったかのようにその場に張り付いている。

《ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……》

なにがお婆さんのしゃくに障ったのかは不明だが、香澄にはもう、謝ることしかできなかった。

ガタンッ……！

突然の物音に震え上がる。

ガタガタガタガタッ！

物音の発信元は郵便受けだということはわかっていた。
だが、それに目を向ける勇気が出ない。

なんだか、見てはならないものを見てしまう気がするからだ。

ガタガタガタガタッ！

「うわっ、うわああああ！！！」

香澄の右腕をなにか冷たい物が捕える。

自分の腕を捕える物に目をやってしまった。

それがなにか認識しなければ、今後の対策を立てることができないのだ。

その行動はごくごく自然な流れといえる。

だが、それでも見てはいけなかった。
それを見たことによって

「てっ、てっ……、
手えええ！！！！！」

と泣き叫ぶことになってしまったのだから。

お婆さんの手は、香澄の腕を物凄い力で引っ張る。

肉がブシブシと、骨がミシミシと悲鳴をあげ始める。

「痛い痛い、痛い痛い！」

必死の抵抗が実のつてか、お婆さんの手は香澄の腕から離れた。
だが、油断は許されない。
まだ、時計を掴まれていた。

《ぐっ。

早くなんとかしないと手首から千切れちゃうよ……》

痛みに顔を歪めながら、必死に対策を考える。

時計の掴まれ方をよく見ると、ベルトの留め金が剥き出しだった。
本体が握られているのだ。

それは、博打だった。

負ければ利腕ではないにしろ、片腕の手首から先が無くなってしま
うことは、火を見るより明らかだ。

だが、打たなければ、完璧に無くなってしまっ。

《神様。

あたしを助けてください！！！！》

香澄は救われた。

お婆さんは、意図的に外された時計だけ郵便受けから外に引き抜いていった。

そして……、足音。

隣の部屋の玄関の音が、恐怖の夜の終りを告げるかのように静かに響いた。

香澄は余りの出来事に、その場に座り込み、意識を飛ばしてしまっ

た。
目覚ましの音。その音は、いつも通りの平和な朝の訪れを示すものだった。

無駄だと頭では解ってはいるものの、つい反射的にいつもの位置に手を伸ばしてしまう。

《……、！！》

驚いた。

心の底から驚いた。

手を伸ばすことによって、目覚ましを止めることができてしまったのだ。

玄関で倒れていた筈の自分に。

《ゆ……め？》

そうとしか考えられない。

《ならなんのために……？》

……！》

香澄はパジャマから着替もせず、家を飛び出した。

香澄は今、お婆さんの部屋の前に居る。

考えが正しければ、この中は修羅場となっている筈だ。

《開けなきゃ。

あたしに託してくれたんだもん、あたしが開けなきゃ……》

何度も自分に言い聞かせる。

そう、

《あたしが》

お婆さんは

《助けて》

隣人に

《あげなきや》

託したのだ。

《この》

自分の

《ドアを開けて》

予想通りに、玄関はあっさり開いた。

その向こうには、お婆さんが眠っていた。

……、永遠に。

その手には、香澄の腕時計が握られていた。
香澄は電話を入れる。

110と、119に……。

香澄は喫茶店で友人を待っていた。

その友人は、芸能人で、大学にも真面目に顔を出している、陰陽師の血を引く者。

引っ越した日に、お祓いをしてくれた友人だ。

その友人の名は、門倉麻里愛といった。

「あつ！」

まーちゃん、まーちゃん！

ここ、ここ！」

「はいはいはい。

で、話つてなに？」

「うん、隣のお婆ちゃんがね……、」

麻里愛に事の経緯を話し始める。

「あたしが襲われたのが、二時なのよ」

「で？」

「なのに、死亡時刻が二二時なんだってさ……」

そこまで一気に話すと、これまた一気にアメリカンドッグを口の中に押し込む。

「前の日の……、だね？」

突っ込まれてしまった。

言われてみれば明言していない。

「そう。

で、お婆ちゃんなんしに出てきたのかなあって気になっちゃって」

……、……、……、……、……、沈黙。

ズゾゾ……。

麻里愛は、残り少ないブルーマウンテンを盛大な音を発てて飲み干す。

「うん、取り憑かれちゃいないよ。

多分、見付けて欲しかっただけなんじゃないかなあ」

「そう……」

不思議な気持ちだ。

「なんであたしだったんだろ？」

「何時間もほっぼられたのが堪らなく寂しかったのかもね。

わたしだっていい加減化けて出たくなるもん」

確かにそうかもしれない。

《やっぱり託してくれたんだ。

あたしに自分のことを》

「どうせだからわたし、神上げしといてあげるよ」

麻里愛はそう約束してくれた。

午前二時。

今日も壁を掻きむしる音で目が覚めた。
目の前にはお婆さんがいた。

《起こしてごめんね。

ありがとう、お嬢ちゃん》

お婆さんは満面の笑みを湛え、旅立って逝った。

（後書き）

久々の短編でしたが、いかがだったでしょう？

アドバイス等いただけると、とても励みになります¥（＾ー＾）／

鍛えてやってくださいm（ー）（ー）m
宜しく願います（＾o＾）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8327a/>

あたしのお隣さん

2010年11月26日07時33分発行